

テモテへの手紙第二4章16－17節「孤独になった時」

1A 仲間に捨てられた時 16

1B 捨てられたパウロ

2B ダビデの逃亡

3B 主イエスご自身

2A 共に立つ主 17

1B 敵対者からの逃亡

2B 独りである時

1C 乱れた町にて

2C 回心前の仲間

3C 嵐の中の船

3A 主の弟子に対する約束

1B ダニエルと友人たち

2B 宣教命令

3B 真実な友

本文

テモテへの手紙第二 4 章を開いてください。私たちの聖書通読の学び、ついにテモテへの手紙の最後になります。午後礼拝で4章を一節ずつ見ていきますが、今朝は、16-17 節に注目します。「¹⁶ 私の最初の弁明の際、だれも私を支持してくれず、みな私を見捨ててしまいました。どうか、その責任を彼らが負わせられることがありませんように。¹⁷ しかし、主は私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。こうして私は獅子の口から救い出されたのです。」

パウロが、今、ローマの牢獄にいます。そして、皇帝ネロの前に既に出ています。この出廷で、彼は自分の死期は目の前にあることを悟りました。自分は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終えたと、7 節で話しています。ここでは一回目の弁明の時のことを、記しています。なんと、彼と共にいた者たちみな、自分を見捨ててしまったのです。しかし、完全な孤独を味わっている時に、主が彼と共に立ってくださったとあり、そのことによって力を得たことを証しています。

孤独という問題は、日本において、いや世界においても、最大の社会問題、そして霊的問題だと個人的に感じています。特に何か大きな混乱が起こっているわけではなく、いや、むしろいつもと変わらない日常生活があるのに、なぜか、強い孤独感を抱くことがあります。以前、日本に住んでいたことのあるアメリカ人は、「皆礼儀しく優しくて、街もきれいなんだけど、僕は謎の孤独感を感じ

ていた。」と告白しています。¹しかし、神の福音は、その真逆のことをします。たとえ、みな自分が
を見捨てたとしても、いや、みなが見捨ててしまった時こそ、主が共に立ってくださるのです。

1A 仲間に捨てられた時 16

1B 捨てられたパウロ

箴言には、苦しい時の友について語っている箇所があります。「17:17 友はどんなときにも愛するもの。兄弟は苦難を分け合うために生まれる。」自分が逆境に置かれている時に、誰が本物の友達かが明らかにされます。自分がうまく行っている時や、成功している時には、人々は寄ってくるものです。極端な例では、誰から宝くじに当たると、急に自分に良くしてくれるしかし、逆境にいる時に共にいる人が、その人こそが共になります。

ですから、パウロが誰もいなかったというのは、相当の衝撃であつたに違いありません。主が彼と共にいて、驚くべきみわざを行ってくださっていた時は、宣教の旅の一行がいたのですが、彼が死刑判決を受けるや、見捨ててしまったのです。

2B ダビデの逃亡

ダビデも、似たような経験をしました。彼を敬愛する人々は数多くいました。ところが、彼の息子アブサロムが反逆して、都エルサレムを乗っ取ってしまいました。謀反を起こす者たち、アブサロムの側に付く者たちが、大勢いました。ダビデの逃亡生活が始まります。その中で、彼の親友である側近、アヒトフェルがアブサロムの謀反に加担していることが耳に入りました。

その時のことを、ダビデが詩篇の中で思いを書いています。「55:12-14 まことに私をそしっているのは敵ではない。それなら私は忍ぶことができる。私に向かって高ぶっているのは私を憎む者ではない。それなら私は身を隠すことができる。それはおまえ。私の同輩私の友、私の親友のおまえなのだ。私たちはともに親しく交わりにぎわいの中、神の家と一緒に歩いて行ったのに。」

3B 主イエスご自身

そして、主イエスご自身が、みなに見捨てられた方です。ゼカリヤが預言しました、「羊飼いを打て。すると、羊の群れは散らされて行き(13:7)」その通りに、「皆は、イエスを見捨てて逃げてしまった。」とあります(マルコ 14:50)。ですから、見捨てられて独りになることを最もよく知っておられる方は、私たちの主ご自身です。

2A 共に立つ主 17

そこで、みなが見捨ててしまうような最も辛い時だからこそ、主が共におられることを、これまでに
はなくはっきりと知ることのできる、大きな機会と神はしてくださいます。私自身の救いの証しもう

¹ <https://youtu.be/XnQ90rz4dnY?t=560>

です。パウロとは違って、私の場合は罪と愚かさがある、孤独を感じたのですが、それであっても、主が自分におられて、自分のすべてをそのまま受け入れてくださいました。みなさんも、そのような孤独という辛い時にこそ、かけがえのない主との体験をしたことのある方がおられるのではないのでしょうか？

1B 敵対者からの逃亡

パウロの話に戻りますと、彼の宣教生活は、敵からの逃避行と言ってもおかしくないぐらい、敵から逃げて行く旅でありました。主ご自身が、パウロについてこう語られていました。「使 9:15b-16 あの人^はわたし^の名^を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたし^の選^びの器^です。彼^がわたし^の名^のため^ににど^んな^に苦^しま^なけ^れば^なら^ない^かを、わたし^は彼^に示^しま^す。」

彼は回心して、すぐにダマスコでイエスこそが神の子であると宣べ伝え始めました。すると、ユダヤ人たちが彼を殺す相談をしているのが耳に入り、それで、彼の弟子たちが、夜に籠に乗せて、町の城壁伝いにつり降りしました。そして時を、第一次宣教旅行に移しますと、彼がリステラにいた時に、アンティオキアとイコニオンから来たユダヤ人たちが、人々を煽って、石打ちにしました。彼は殺されかけました。

そして、第二次宣教旅行で、彼はマケドニア人の夢を見て、初めての欧州への宣教の旅を始めましたが、これが逃避行だったのです。ピリピにおいては、同行のシラスと共にむち打ちにあいました。それから、テサロニケに移りましたが、騒動が起こったので夜のうちに二人は出て行って、ベレアに行きました。ベレアの人々は聖書をよく調べていましたが、なんとテサロニケのユダヤ人たちが騒ぎを起こしにきました。それで、パウロだけを船に乗せて、一人だけでアテネに行きました。アテネでは、アレオパゴスで説教しましたが、幾人かの人々だけがパウロに付いていただけでした。

2B 独りである時

1C 乱れた町にて

それで、コリントの町に到着したのです。コリントは、非常に大きな貿易の町でしたが、道徳的に腐敗していました。シラスとテモテがマケドニアからやってきました。この時、パウロは自分の心の状態を、コリント人への手紙第一で話しています。「2:3 あなたがたのところに行ったときの私は、弱く、恐れおののいていました。」彼も生身の人間です。弱く、恐れていたのです。

彼は、会堂で、みことばを語りましたが彼らが口汚く罵りました。それで彼は、会堂の外に出て、異邦人の神を敬う人々のところで行きました。少しずつ人々が信じて行きます。そして、こう書いてあります。「使徒 18:9-10 ある夜、主は幻によってパウロに言われた。「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」」主が幻の中で、語ってくださいました。そ

して、共にいると約束してくださいました。それで、パウロがそこに一年半の間、腰を据えて、みことばを教え続けたとあります。

2C 回心前の仲間

パウロの第三次宣教旅行では、エペソでの働きが著しいものでした。しかし、アルテミス神殿の銀細工人が騒ぎを起こしたら、野外劇場で大騒動になりました。そこを彼が出て行き、コリントの方に行きます。彼は、エルサレムに行かないといけないと示されていました。エルサレムに行ってから、ローマに行かなければいけないと示されていたのです。コリントに行った時に、パウロが船出しようとしたら、ユダヤ人たちの陰謀に気づきました。船から突き落とそうと企んでいたのでしょう。それで、歩いてマケドニア経由でエルサレムに行くことに決めました。

エルサレムに付いて、他の人々と共に神殿で礼拝をしていたのですが、それを見たユダヤ人が騒動を起こしました。アントニオ要塞に駐屯していたローマの千人隊長が、引きずり出しました。パウロは、その群衆に向けて、ヘブル語で語り始めたのです。パウロにとって、彼らは古巣の仲間です。共にユダヤ教を学んだ仲です。ですから、彼らが猛烈にイエスの道に反対する気持ちも分かります。それで彼が話している時、人々は一心に聞いていました。ところが、イエス様が、「わたしはあなたを遠く異邦人に遣わす」と言われたことを話した途端、再び騒動が起こりました。

それで千人隊長は、自分の保護の下で、彼を最高法院に入れて行きました。すると、彼らの間で再び騒ぎが起こりました。パウロのからだがり引き裂かれてしまうのではないかと恐れて、千人隊長は再び彼を引き出して、兵営に戻しました。その夜のことです。「23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならない」と言われた。」パウロは、人生最悪の時だったの違いありません。同胞が救われることを彼は強く願っていました。しかし、彼の証しで救われる人は一人もおらず、騒動が起こるだけでした。しかし、主はその夜にパウロにそばに立ったのです。そして、彼のエルサレムでの証しを失敗だとなじることは、一切ありませんでした。むしろ、エルサレムで証したように、ローマでも証しなさいと励まされたのです。

3C 嵐の中の船

彼は千人隊長によって、カイサリアに移送され、そこで牢屋に入っていました。そこから、囚人として他の囚人と共に、船に乗ってローマに移送されます。ところが、そこで嵐に遭いました。みなが助かる希望を失いかけていました。けれども、パウロが立ち上がって励まします。「使 27:22-25 しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う人は一人もありません。失われるのは船だけです。昨夜、私の主で、私が仕えている神の御使いが私のそばに立って、こう言ったのです。『恐れることはありません、パウロよ。あなたは必ずカエサルの前に立ちます。見なさい。神は同船している人たちを、みなあなたに与えておられます。』ですから、皆さ

ん、元気を出しなさい。私は神を信じています。私に語られたことは、そのとおりになるのです。」

お分かりですか？パウロが、コリントにいた時、そしてエルサレムにいた時、そして、海の上にいた時、最悪の状態だった時に、彼はかけがえのない、共におられる主の体験をしています。その度に、主は彼を励ましておられます。最悪の時には、必ず原因探しをするものです。自分がこんなことをしたから、こんな状況に陥っていると自分を責めるものです。また周囲の人々もそうみなすでしょう。しかし、そばに立つ主は、ただそばに立つだけでなく、これまでになく励まし、ご自分のみこころを行うように命じられるのです。

3A 主の弟子に対する約束

この方が、私たちの主です。私たちがこの方を主としている限り、この方を主として仕えている限り、主は共におられ、試練の時には特に、共におられることを明らかにしてください。

1B ダニエルと友人たち

ダニエルとその友人たちがそうでしたね。友人たちは、燃える火の炉に投げ込まれました。炉の中を見た、王ネブカドネツアルが驚きます。「ダニ 3:24-25 そのとき、ネブカドネツアル王は驚いて急に立ち上がり、顧問たちに尋ねた。「われわれは三人の者を縛って火の中に投げ込んだのではなかったか。」彼らは王に答えた。「王様、そのとおりでございます。」すると王は言った。「だが、私には、火の中を縄を解かれて歩いている四人の者が見える。しかも彼らは何の害も受けていない。第四の者の姿は神々の子のようだ。」」神の御子キリストが、今、三人の中におられて、歩いているのです。

預言者イザヤも、このことを預言して、どんなことがあっても主が共におられるという、神の約束を伝えます。「43:2 あなたが水の中を過ぎるときも、わたしは、あなたとともにいる。川を渡る時も、あなたは押し流されず、火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。」

2B 宣教命令

主にお仕えしている者たちは、多かれ少なかれ、必ず、試練を受けます。試練を受けると、自分しかないという落胆が襲ってきます。主はそのことを知っておられて、宣教命令と共に、ご自身が共におられる約束をくださったのです。「マタ 28:19-20 ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」パウロは、まさに弟子たちとしていく働きの中に従事していました。主が、共におられるという約束が確かであったという経験をしました。みなさんも、全く同じです。主イエス様にお仕えしている時には、どんなに独りだと感じていても、主が共におられます。

3B 真実な友

再び、箴言から友についての格言を見ます。「18:24 多くの友に関わる人は身を滅ぼす。しかし、兄弟以上に親密な友人もいる。」兄弟より親密な友人ですが、まさにイエス様です。イエス様が弟子たちに言われました。「ヨハ 15:13-14 人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。わたしが命じることを行うなら、あなたがたはわたしの友です。」

大勢の中にいても孤独は感じます。逆に、大勢の人に見捨てられても、これまでに最も大きな励ましを受けます。イエス様が共におられることは、何十、何百の友がいたとしても、取って替えられることのできない、永遠の財産になります。